

第4節 確認された縄文時代以外の遺物

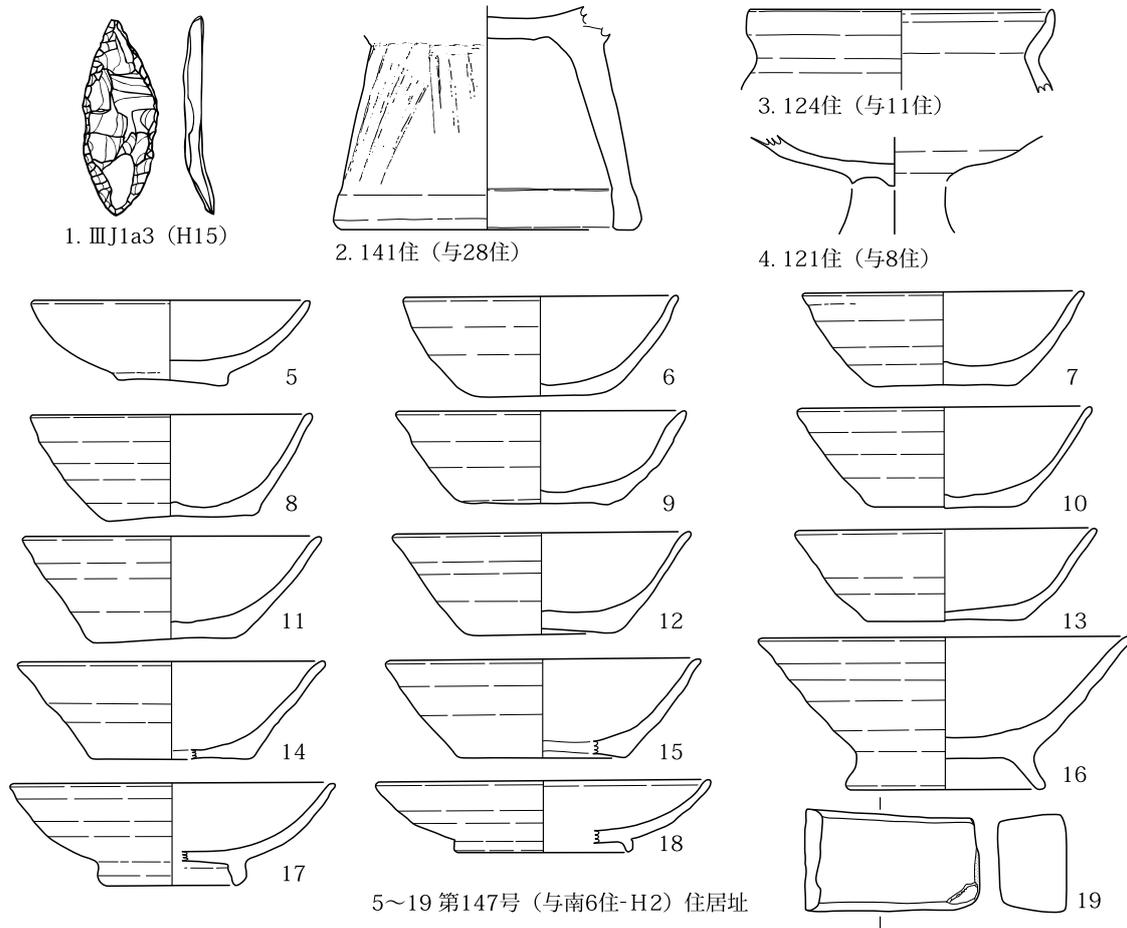
1. 旧石器時代の遺物

尖石遺跡Ⅲ区 J1a3 から黒曜石製の槍先形尖頭器である（第74図1）。遺物包含層は確認されておらず、単独出土のために旧石器時代の状況を把握することはできなかった。

八ヶ岳西麓で旧石器時代の遺跡は、遺物が散発的に確認されている中ッ原遺跡（黒曜石製槍先形尖頭器）、古田城址（黒曜石製ナイフ形石器）や、柳川沿いには黒曜石製槍先形尖頭器の製作址である夕立遺跡、黒曜石製槍先形尖頭器のブロックが確認された馬捨場遺跡が確認されており、密な状態ではではないものの旧石器時代からこの地が生活の舞台として利用されてきたことが確認できた。

2. 古墳時代の遺物

第74図2 台付甕脚部が与助尾根遺跡第141号（与28号-S27）住居址覆土内より出土している。脚部はハ字状に直線的に広がる。器表は縦位ヘラ削り整形が施されている。第74図3 土師器小形壺片が与助尾根遺跡第124号（与11号-S24）住居址の覆土から出土している。口縁部がやや受け口状になる特徴的な器形を呈する。また、現品は不明であるが、与助尾根遺跡第121号（与8号-S24）住居址上層から高坏破片が出土している。資料紹介記事によると前面赤褐色でよく研磨されている高坏坏部破片で、略測図には脚部と



第74図 旧石器時代・古墳時代・平安時代の遺物（1、2/3・2~19、1/3）

第5章 調査の成果

接合するための突起が描かれている（第74図4）（文献:67）。

八ヶ岳山麓に於ける古墳時代初頭の茅野和田遺跡の集落について鶴飼幸雄は、弥生時代後期からの山棲みの系譜を引くものと捉えており（文献:68）、与助尾根遺跡の事例も同様の事例と捉えるべきであろう。

3. 平安時代の遺物

与助尾根南遺跡第147号（与南6号-H2）住居址から土師器坏・高台坏坏・黒色土器坏、灰釉陶器碗・皿、土師器甕が出土している。これらの土器類から10世紀後半に帰属すると考えられる。これらの土器類の他に砥石、鉄滓も出土している。このような遺物出土傾向は他の八ヶ岳西麓平安時代後期でも窺える傾向で、山麓部の立地と環境を活かした農業生産や手工業生産が営まれていたと考えることができる。

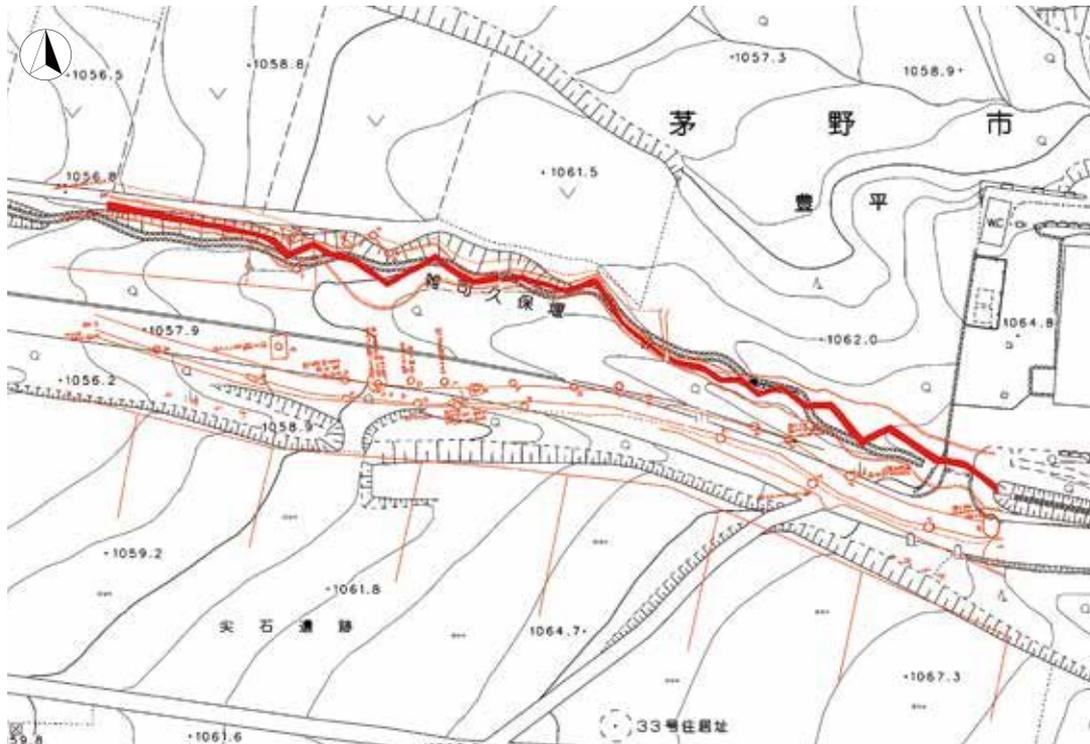
（守矢昌文）

第5節 遺構全体図の作成と調査区の設定

1. 遺構全体図の作成について

尖石遺跡の調査区と遺構全体図の作成は早くから着手され、大正13（1924）年12月『諏訪史』第1巻の第十五圖尖石發掘地點指示圖（文献:54c）に、畑境ごとの区分と調査地点、土偶発掘地点が示され、これが尖石遺跡での調査区を示した最も古い調査区図となるが、この図は地図に基づくものでなく縮尺も示されていない概略図である。

その後昭和4年の伏見宮の調査も調査記録は残されていない。昭和5年宮坂英弐と小平幸衛は東嶽4734-2960南側半分と、現在の市道甲1号線沿いを調査している。その際豊平小学校主席訓導今井広亀が平板測量を導入し、市道甲1号線と調査地点、畑境界、堂自久保堰を示した『尖石遺跡地圖 其弍』昭和五年



第75図 尖石遺跡現況図と昭和5年調査区測量図との合成

夏発掘縮尺參百參十分之一を作製刊行している（文献:20a）。

その後この今井広亀の示した畑境界と道路現況に基づいた測量図が原点となり、昭和9年以降宮坂英式により発表される数多くの尖石遺跡の調査報告に調査区図として用いられている。また、昭和15年9月29日に諏訪史談會により実施された尖石遺蹟踏査及講演会時配布資料には公図に調査遺構地点を記入した「長野縣諏訪郡豊平村尖石遺蹟石器時代住居址分布図」1/600が貼付されている（文献:69）。

これらの資料によると市道甲1号線沿いで実施された宮坂英式等の調査は、拡張以前の市道甲1号線（通称山道）沿いで行われ、山道と畑間にある`空堀、と呼ばれる旧堰流路内で発掘調査を行っていないことがわかる（註:17）。しかし、昭和32年『尖石』に添付された地形図上に発掘調査された炉址・住居址等を入れた「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」縮尺1/1,500（文献:1m）や、「第1図調査年度別発掘区」縮尺1/1,500（文献:2c）では`空堀、内に調査箇所が入り込んでいることになっている。この相違点を今回総括報告書作成に当たり検討するため、『尖石遺蹟地圖 其式』に示されている畑境界図と、昭和51年航空現況写真、平成5年作製尖石遺蹟周辺1/1,000現況図を合成した結果、「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」（文献:1m）等で示されている市道甲1号線沿いの調査地点が、全体的に南側に寄っていることがわかり、全体的に北側に移動することが妥当であるとの結論に達し、この結果を反映し新たな「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」を作成し直した。

与助尾根遺跡も「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」縮尺1/1,500に地形と住居址分布を合成した図と、「与助尾根遺跡発掘竪穴住居址分布図」縮尺1/225の遺構全体図が『尖石』に掲載されている。

平成10年与助尾根遺跡の遺構試掘調査が行われ、試掘調査の全体図として「第2図発掘区と遺構の分布」縮尺1/400（文献:70a）が示された。この試掘調査で得られたと竪穴住居址の位置と、昭和21年から昭和27年にかけて宮坂英式が調査した竪穴住居址の位置にずれが生じておりその点について試掘調査者の小林は

「検出した遺構には、宮坂氏の確認した住居址と位置がずれているもののがかなり見受けられる。これは当時平板測量を行ったものを、現在確認されている落ち込みとの位置関係で重ねたために生じた誤差と考えられるが、検出された遺構からの誤差を修正できるまでの資料がそろっていない。」（文献:70b）

との問題を提起し「第2図発掘区と遺構の分布」縮尺1/400を作成している。この図によると与助尾根遺跡第119号（与6号-S23）住居址と第179号（与遺47-H10）住居址や、第134号（与21号-S25）住居址と第180号（与遺51-H10）住居址は重複し同一の住居址である可能性が考えられるが、調査所見では宮坂の調査痕跡が認められなかった点から別住居址としている。今回総括報告書作成時に測量者矢島数由が残した調査記録『如雲諏訪史抄 竪穴考』（文献:18c）に記録されていた住居址間の距離と、平成5年作成の1/1,000現況図に示されていた宮坂の調査住居址跡として記録されていた窪地標記とを照合した結果に基づき、総括報告書では新たな「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」を作成したが、与助尾根遺跡第119号（与6号-S23）住居址と第179号（与遺47-H10）住居址、第134号（与21号-S25）住居址と第180号（与遺51-H10）住居址は調査所見を重視し重複する住居址として表記してあるが、若干位置をずらすことにより規模等が重なり同一の住居址をダブルカウントしている可能性も捨てきれない。

2. 試掘調査区の設定とその方法

尖石遺跡は昭和27年国特別史跡指定を受けた後、昭和29年7月の遺構展示棟建設に伴う調査以降、民有地として管理されてきていたが、深耕の危惧等から公有化が進められ、平成元年までには指定面積の約91%の公有化が終了してきていた。そこで、遺跡の保存状態や、遺跡全域の遺構埋蔵の状況を確認するため

第5章 調査の成果

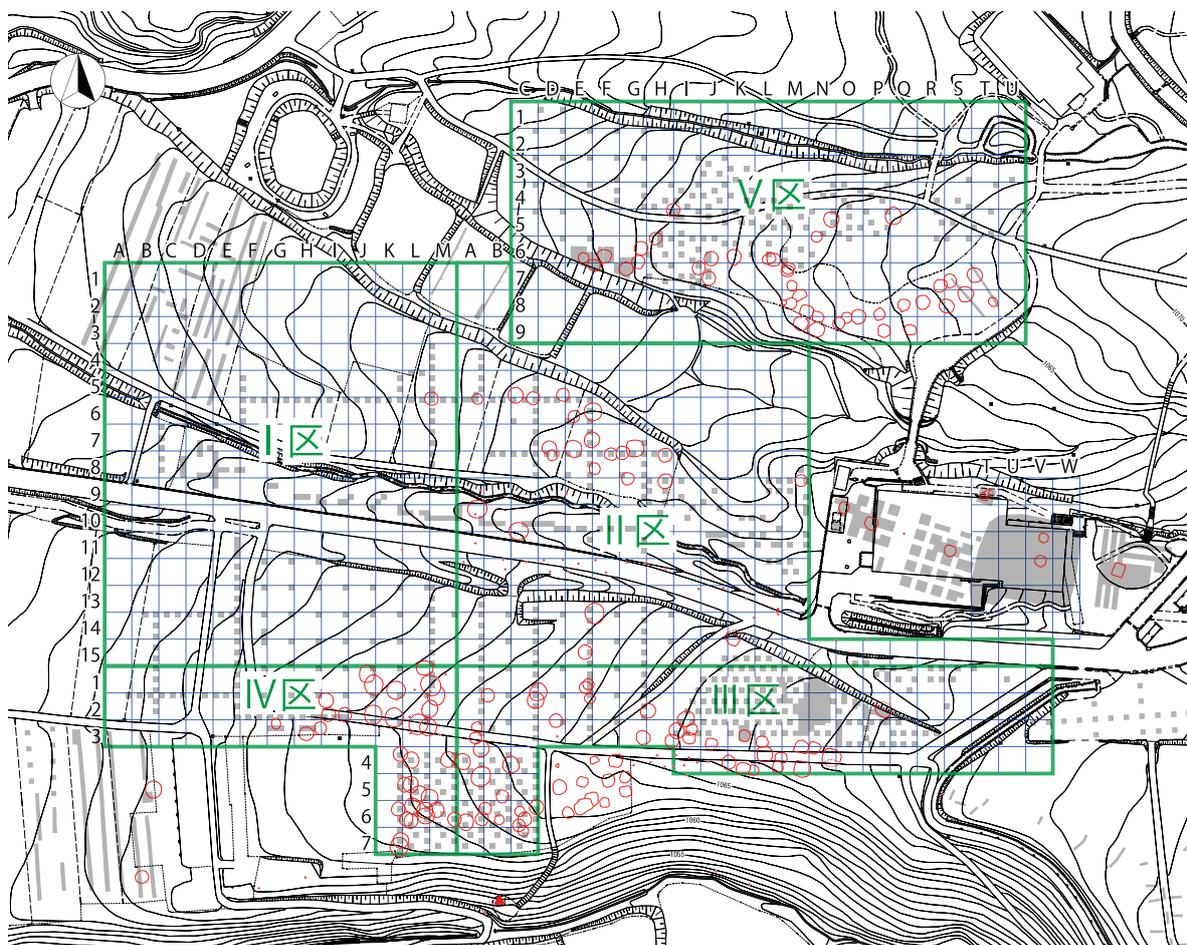
史跡試掘調査が行われることとなった。

調査の目的は調査年次により若干の差異はあるものの、昭和4年から昭和17年まで宮坂英式等が調査してきた尖石遺跡集落・与助尾根遺跡の実態を把握することを目的に平成2年度から断続する年次はあるものの平成17年まで12次に亘る試掘調査が行われた。

遺跡内を継続的に調査していく上で、その調査成果を正確に地図上に反映するため、公共座標 X=1180、Y=-23890 の交点を A-10 (標高 1,058.784m) を基点とし、調査区北西隅 X=1290、Y=-24020 の交点を I 区 1A の始点に、北南軸を 10m 間隔で 1 から 15、西東軸を 10m 間隔で A から M の区分を与え、この 10m 四方を大グリッドとし、この大グリッドを基本にこの中を北南方向に 1 から 5、西南方向に a から e の番号を振り 2×2m 単位の小グリッドを設定している。この小グリッドが試掘調査の基本的な調査区画となっている。なお、I 区から V 区の割り振りは基本的には尖石遺跡範囲を北西側から時計回りに I 区から IV 区、与助尾根遺跡範囲を V 区としている。各大グリッドの番号配列は、II 区では北南軸 1 から 15、西東軸 A から W まで、III 区では北南軸 1 から 7、西東軸 A から V まで、IV 区では北南軸 1 から 7、西東軸 A から M まで、V 区では北南軸 1 から 6、西東軸 C から U までとなっている。調査年度の記録や遺物の取り上げについてこのグリッド番号を用いている。

なお、平成13年度の杭打ち作業での調査区表示に誤りがあり、取り上げた遺物の注記について誤表示となっているが、報告時に収納コンテナ・ビニール袋標記、報告書標記については訂正を行っている。

(守矢昌文)



第76図 試掘調査区割図

第6節 尖石遺跡の原地形

1. 地形と尖石遺跡の集落観

試掘調査の目的の一つには尖石遺跡の地形を捉えることがあった。そのため、初回の平成2年度では地形と空堀の関係、及び台地南北方向の土層の堆積状況を調査対象としたことで、東側の平坦な地形が北と南側の尾根に分かれ、中央部が谷状で浅く皿状に窪むという、台地全体の地形のあり方が考えられた。

初回の調査が遺跡の西側であったのに対し、その後の調査は地形の高くなる東側に移ったこともあり、平成5年度の調査では中央窪地を含めて台地上の微地形が注目されることとなった。その結果、尖石の台地には遺跡内を西へ延びる小さな浅い谷が2本入り、これによって集落は三つの尾根に分かれていた可能性が考えられるようになった。つまり、この谷地形をどのように捉えるかにより、尖石の集落形態についての理解が大きく異なってくるということである（第76図）。

このことと関連し、尖石遺跡の中央を流れる雑司久保堰の問題がある。雑司久保堰は江戸時代に開削された用水堰で、自然の河川ではない。しかしこれを自然の河川とみて、この細い川によって仕切られた北の尾根を中尾根とし、ここにもムラが展開するという見方がある（文献:71）。

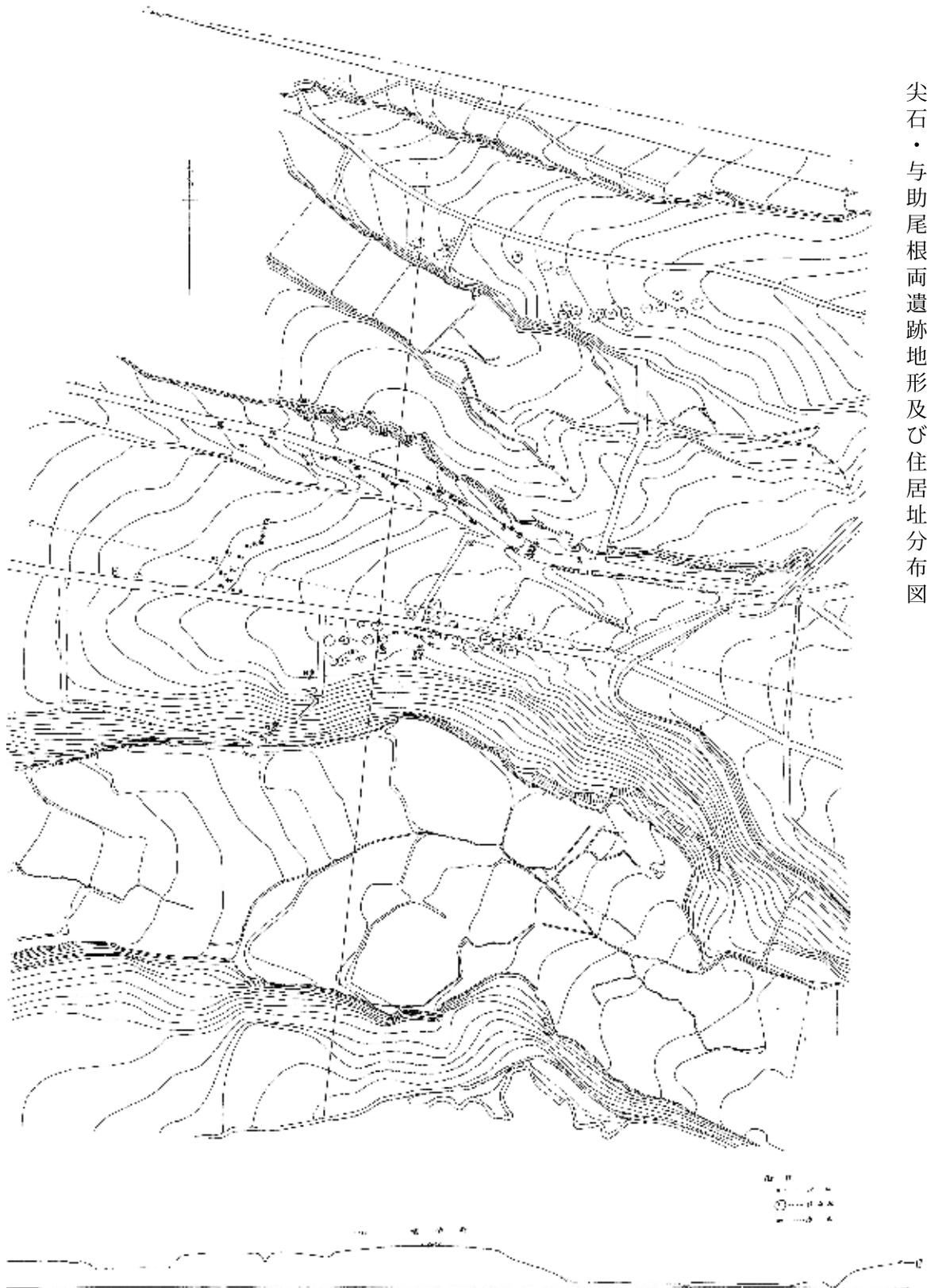
このように、第4章第5節に記す試掘調査の経過をみても、遺跡の地形が集落構成に大きく影響する。換言すれば、住居配置が地形に規制されるという見方に基づいて集落観が提示されてきている。平成28年度の『特別史跡尖石石器時代遺跡保存管理計画書』（文献:72）でもその視点はいかされているが、そこでの集落観は『整備報告書(2)』（文献:2d）とは異なるものとなっている。しかし、そこに至るまでの検討の経過は示されていない。筆者も尖石遺跡の地形と集落の関係は『保存管理計画書』の捉え方と基本的に変わらない。そこで、ここでは尖石遺跡の集落観に大きく影響している尖石遺跡の地形のあり方について、試掘調査の所見をもとに検討しておきたい。

2. 中尾根の検証

まず、ここで問題となるのは台地上の三つの尾根の捉え方である。この視点は、『整備報告書(2)』（文献:2d）で示されたように等高線のあり方から想定されるもので、台地中央を東西に通る空堀・市道とその北の雑司久保堰の間の地形を尾根地形とみるものである。

しかしながら、この等高線に表れた尾根状の高まりは、本来の地形を表してはいないと考えられる。それは、一つには空堀と雑司久保堰の開削による経年の土壌の流出ということがあろう。特に雑司久保堰は尾根の頂部から地形が低くなる中央窪地の中心部へ通されており、堰路が尾根から窪地へ移行する辺りから西側では、主に北側の尾根地形に水流による経年変化の影響を与えてきたと推測される。また、かつての山道・林道の建設と管理、その後の市道の建設、及び市道と雑司久保堰の経年の維持管理も関係してきたと思われる。平成6年度の市道と雑司久保堰の間の調査では、市道建設時の削平土の盛土とみられる土層（文献:73a）が確認されている。

ところで、試掘調査では各グリッドを遺構確認面まで掘り下げて土層断面図を作成している。遺構は第4層とした黄褐色土層（ローム漸移層）からローム層上面で確認されている。そこで、各グリッドの底面をローム層上面と仮定して土層断面図から標高値を求め、遺跡を横断するグリッドの南北ラインで断面図に復元して地形を検討してみた。復元した南北ラインは、中尾根とされた空堀と雑司久保堰の間の地形を挟んで検討



第77図 「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」に示された南北「断面図」(文献:1m)

可能な位置での土層断面図の作成されたⅠ区L—M、Ⅱ区C—D、Ⅱ区G—Hの3本である。今回は復元図を示せなかったが、検討の結果では、市道から雑司久保堰を越えた北側では、ローム層上面はなだらかに続く平坦な高さを示しており、中尾根とされた場所での尾根地形と認められるような大きな地形の変化はない。

昭和5年に石囲埋甕炉の発掘されたF地点は62号(1号炉址-S5)住居址である。同様にJ地点は66号(2号炉址-S5)であり、5節での調査区全体図の再検討の結果では両地点は市道に位置している。F地点の石囲埋甕炉の「深さは道路の面から僅か10糎に過ぎない。もう一夕立来て道の流れれば、石も土器も表面に露はれる程の浅いところである。」また、J地点の石囲埋甕炉は、「一番高い北の石は、道路の面から約十六七糎しか埋まって居なかった」(文献:27b)。おそらく当時の山道はローム層上面近くで、林道に改修される昭和8年以前は、「路面は長い間雨水に洗われ、次第に基盤の赤土層に喰い込んで低下し」(文献:1i)ていた。そのため、山道の路面をローム層上面とすれば、F地点の石囲埋甕炉をもつ住居址のローム壁高は10cm前後、同様にJ地点の石囲埋甕炉をもつ住居址は、今井生による「豊平村尖石遺跡発掘見取図」(文献:1n)からみると、30cm程度はあったものと思われる。

今回再検討された林道沿いの調査地点の位置と市道の関係では、F・J地点の炉址はローム面下に位置しているとみられ、また、市道上面の標高値などから市道の路盤はローム層中にあると考えられる。平成2年度の調査で、市道の南に沿う空堀は地山を深く削って設けられており、空堀の通る中央窪地には地形を画すような自然の深い谷地形のないことも明らかになっている。したがって、空堀の南側から雑司久保堰の北側にかけては、「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」(文献:1m)の南北「断面図」(第77図)に示されているように、途中にV字形の雑司久保堰が入るものの、南縁と北縁がわずかに傾斜面となる平坦に近い地形となるのである。

3. 南尾根と中央窪地の地形

『尖石』(文献:1m)の地形図と試掘調査時の地形図(文献:23a)(文献:22d)とを比べてみると、南北の尾根とその間の中央窪地の形状には微妙な変化のあることが看取される。それは特に南尾根の頂上線を中心とする尾根地形の変化と、それに伴う尾根北側裾部の傾斜の緩みである。これは経年の耕作、特に昭和40年代以降の農業の機械化に伴う土壌の移動による形状変化と推測される。

宮坂英式が昭和16年に南尾根の頂上線を通る南作場道に接して発掘した尖石遺跡18号住居址は、「現地表下、1.10m(黒土層30cm、褐色土層30cmを経て基盤の赤土層を50cm掘り下げる)の深さにあり」、その東10mにある未完掘住居址は、「現地表下、1.10mの深さに住居址の床面を発見し」(文献:1o)としている。

これに対し、50年後の平成2年度の試掘で再発掘をした18号は、現地表下80cm(耕作土層25cmを経て赤土層50cm)の深さにあった。また、34号とした「未完掘住居址」も現地表下80cmに床面を確認している。その東側につづく尖石遺跡第89号(遺2-H2)・90号(遺3-H2)住居址付近では第Ⅲ層が部分的に残るところもあるが、第Ⅰ層下は直ちに第Ⅳ層(黄褐色土)となり、現地表下40cmでローム面となっている。さらにその東の平成8年度調査のⅣ区K3e1グリッドでは、現地表下50cmの深さに中期中葉の住居址とみられる尖石遺跡第168号(遺12-H8)住居址の床面が検出されている。

平成2年度の調査所見では、「空堀の南肩部に位置する6カ所のグリッドで、遺物包含層(第Ⅱ・Ⅲ層—筆者註)のある安定した土層の堆積が認められた」(文献:23d)ものの、その南側につづく平成4年度のⅠ区M13a1～Ⅳ区1a1列の調査では、第3層は南に行くに従い厚みを減らしており、Ⅰ区M15a1から「南側に第3層がみられないのは、長年の耕作により削平され、消滅したものと思われる。この付近に第3層が形成

第5章 調査の成果

されなかったとは考えにくい。I・IV区の地形は南側と東側に緩く上る傾斜をしているが、原地形の傾斜は現在より若干強かったのではないかと考えられる」(文献:25a)と報告されている。

遺物包含層の第3層は、平成2年度の調査所見でも尾根の高まりとなる南作場道に沿う尖石遺跡第89号(遺2-H2)・90号(遺3-H2)住居址付近でもみられない(文献:23a)。これはその後の調査でも表土層下が直に覆土となるなど、本来は第3層あるいは第2層も広くあったと考えられる。また、長年の耕作により尾根の裾部となるI区14南～IV区1にかけては、土層が削られ地形が平坦化したことで、現在の窪地は原地形よりも傾斜の幾分緩い地形に変わってきたと考えてよいであろう。

こうしたことから、南尾根の頂上線の地形は50年を経て平坦化され、第3層あるいは第2層などが削られ、30cm程度は低くなっているとみられよう。原地形は、南尾根が今より高く、裾部の傾斜もいくらか強い、やや変化のある地形であったと捉えるべきであろう。

4. 北尾根・南尾根と中央窪地

尖石の台地は、台地中央の標高1,066m辺りの地点を基点に、北側と南側の縁に向かって緩い尾根状の高まりが二股状に伸びており、その間に浅い谷状の中央窪地が湾入する形態を見せている。北側の北尾根は与助尾根南へ入る谷と中央窪地の間を北へ伸びる低平な地形で、標高1,060mあたりから狭まって細尾根状となり、向きを西へとりながら台地の北縁を緩く下っている。一方、南側の南尾根は北尾根に比べて幅が広く規模が大きい。稜線も北尾根に比べると高い。台地の南の縁に沿って西へ伸び、史跡境からさらに西側へ伸びて尾根の高まりは台地の南の縁に尽きている。

南北両尾根の間に広がる浅い谷状の中央窪地は、台地中央部の平成7年度調査の尖石遺跡第158号(遺42-H7)・159号(遺43-H7)住居址あたりを頂部に西側へ徐々に広がり、標高1,060m付近から扇状の広がりを見せて西側の平坦な地形へつづいている。この中央窪地の中央部に位置する雑司久保堰と市道の間の区域は、平成6年度の調査によってI区K10e1・2から西側では地形が北側の雑司久保堰へ向かって傾斜していることが捉えられている。また、部分的に小礫を含む溝が数本検出されており、これらはいずれも南東方向から北西方向へ伸びるもので、雑司久保堰へ流れ込む水みちであったと考えられている(文献:73b)。こうしたことから、窪地の中心筋は尖石遺跡第158号(遺42-H7)・159号(遺43-H7)住居址付近から北西方向へ市道を越え、I区K10e1・2付近から現在の雑司久保堰の流路につづく線形を示すものと思われる。

尖石遺跡の地形は、中央の浅い谷状の窪地を挟み、南尾根と北尾根の地形の高まりが東側から西側へ大きく開いた形である。空堀とそれに沿う市道(かつての山道・林道)、及び雑司久保堰は、湾入する中央窪地のほぼ中央部に通されている(文献:23d)。

(鵜飼幸雄)

第7節 自然科学分析による環境復元

1. 遺跡環境復元に係る自然科学的調査

縄文時代の人々は自然環境の変化に適応して生活を営んでいたが、それを裏付けるためには自然環境や自然遺物の情報が必要である。また、従来の台地上に於ける発掘調査でその痕跡を探ることは難しく、尖石遺跡と与助尾根遺跡の間に位置する谷部の堆積物の自然科学的調査を行い、台地平坦部や谷部の自然環境の把握と、その変化を明らかにすることを目的に、年代測定・植物微化石分析・大型植物遺体分析・土壌調査を

実施している。その成果は「附編 自然科学的調査」(文献:74a)にまとめられているので、詳細については報告書に譲り本編では、各項目の概要について記載する(註:18)。

(1) **放射性炭素年代測定** 放射性炭素年代測定資料は、尖石遺跡と与助尾根遺跡間谷部の試掘トレンチ 1T1・1T2・2T1・2T2・2T3 の5ヶ所からの有機性堆積物を中心に層位ごと採集した16ヶ所と、尖石台地調査区Ⅱ区 G14e4 東壁4層内炭化材、Ⅲ区 G2e3 第154号(遺4-H7)住居址南西側覆土内炭化材、Ⅲ区 E1e2 出土土偶脚部接合芯材炭化材について実施している。その結果尖石遺跡と与助尾根遺跡間谷部に堆積していた有機性堆積物は、おおよそ700±50から2610±50年BPに堆積したものであり、補正した放射性炭素年代でⅡ区 G14e4 東壁4層炭化材 4480±60年BP、Ⅲ区 G2e3 第154号(遺4-H7)住居址南西側覆土内炭化材 4150±50年BP、Ⅲ区 E1e2 出土土偶脚部接合芯材炭化材 4320±50年BPの数値を得ている(文献:74b)。

(2) **花粉分析** 花粉分析資料は尖石遺跡と与助尾根遺跡間谷部の試掘トレンチ 2T2-P-1053.89 (1)、2T2-P-1053.85 (3)、2T2-P-1053.21 (36)、2T2-P-1052.97 (48)、2T2-P-1052.85 (54) の5層で分析資料を採取している。花粉群集の種構成及び層位的な産出状況から植生の変化を、便宜的にAからDの4期変遷を設定している。分析の結果4期を通して谷部は湿地環境で、台地上は森林環境と明るい草地の多い疎開地の環境であったことがわかるが、植生変化によりA期の縄文時代後期前半以前は、温帯落葉広葉樹を主体とし(クリ属の花粉出現率40%と高い)、温帯針葉樹を交える森林と草地を持つ人里的な環境が想定されている。B期の縄文時代後期から晩期にかけては温帯針葉樹が優占し、気候は湿潤冷涼な環境とされている。C期は弥生時代後期から古墳時代、平安時代以降に当たり、A期の植生に類似しているが、谷部の湿地林と湿地植生の発達に特徴がある。D期は現代の水田土で植生は針葉樹人工林(ニヨウマツ亜属が40-50%の出現率)で植林植生を示している(文献:74b)。

(3) **珪藻類分析** 尖石遺跡と与助尾根遺跡間の湿原環境を復元するために、試掘トレンチ 2T1の層序別に分析試料を6試料採取した。分析の結果27属118種が確認され、浅い部分 2T1-Di-1053.68(深さ23cm)と深い部分 2T1-Di-1053.02(深さ89cm)では種構成が大きく異なり、深い部分では *Pinnularia* 属と *EUnotia* 属が優占している特徴があった。調査の結果谷部には湿原が形成され、土砂堆積しながら次第に発達しミズゴケが生育した中間湿原まで変遷しているが、現地地表下60cm付近で湿原は破壊され、水田へと変遷していった過程を珪藻分析から把握することができる(文献:74c)。

(4) **植物珪酸体分析** 谷部から採取された有機性堆積物が確認され、植物珪酸体を含む生物遺体の含有が期待された。また、住居址内覆土の植物珪酸体分析を行うことで住居の素材や周辺環境の情報を得るために分析を行った。試料は谷部試掘トレンチ 1T2、2T1、2T3 から9試料、Ⅲ区 G2e3 尖石遺跡第154号(遺4-H7)住居址覆土から試料の採取を行った。分析の結果、栽培種のイネ属が検出されているが、周辺で稲作が行われており混在等も考慮すべきであるが、放射性炭素年代測定で1480±60年BPを示す層(1T1-Po-1052.47、1T1-C14-1052.47)からも栽培種のイネ属が検出されているため、今後周辺での稲作の状況を復元することが課題となっている。Ⅲ区 G2e3 尖石遺跡第154号(遺4-H7)住居址覆土ではタケ亜科が優占し、また、ウシクサ族が多数見られ、ウシクサ族は短細胞珪酸体の産状からススキ属の可能性が高く、周辺は比較的乾燥した草原景観が想定される(文献:74d)。

(5) **大型植物遺体の分析** 谷部から採取された大型植物遺体が確認され、36試料を採取し、内11試料について分析を加えている。その結果ニレ属、ハンノキ属の自然性の高い湿性森林群落が谷部に分布していた結果が得られる(文献:74e)。

(6) **土壌分析** 史跡整備に於ける古環境をできる限り復元した森林を作るため、現地土壌に適した樹木

第5章 調査の成果

選定の基礎資料作成を目的に土壌分析を実施している。分析の結果、尖石遺跡の土壌は火山性を母体とし、現代の農業の影響を受けている。湿地を除けば大部分が植栽可能地であるが、土壌層の下層部が堅く締まっているので巨木となるような樹木の植樹は不適であるとの結果が得られている（文献:74f）。

2. 史跡整備・保存管理に係る植生、動物相、水文環境の環境調査

茅野市尖石縄文考古館を中心に国特別史跡尖石遺跡指定地と、隣接する茅野市青少年自然の森を合わせると約 130,000m²の面積が、原野・山林として残されている。この広大な原野・山林を今後整備・維持し縄文時代の景観の復元を目指すための基礎的資料とするため、史跡指定地と青少年自然の森を対象地区として植生・動物・水分環境について現状調査を株式会社パスコに委託し実施している（文献:72b）。この自然科学分析は現状に於いての環境調査が主目的で、尖石遺跡や与助尾根遺跡に集落が営まれた縄文時代中期の環境復元を目的にしたものでなく、この環境調査の結果を則縄文時代中期の植物相や動物相に当てはめることは難しい。しかし、水分環境調査により示された谷戸の湧水環境が自然湧水であることが確認されたことは、集落と水場の関係を窺い知る手掛かりとなる。

(1) **植物** 植物相と植物群落に関する調査が行われている。

植物相の調査結果では特別史跡指定地内で 91 科 342 種、青少年自然の森地で 95 科 348 種、森林計画地で 77 科 235 種、合計 103 科 469 種の植物種が確認されている。史跡指定地周辺は古くから植林地・牧草地・耕作地として利用されていたため、カラマツ・アカマツ・ハリエンジュなどの植林種、落葉広葉樹のクリ・コナラ、斜面部にはケヤキ・ミズキ等、湿潤地にはハンノキ等の樹林が形成されている。史跡公園として来館者を迎え入れていることから、草地にはシバの他ハルジオン・ヒメジオン・オオハンゴンソウ等の外来種が確認されている。自生種は青少年自然の森の尾根部に分布する大径のクリーコナラ群落に、ケマルバスマミレ・ツルリンドウ・フユノハナワラビ等が確認され、考古館北側のハンノキ群落周辺にはツリフネソウ・ゴマナ・クモキリソウ等が確認されている。

植物群落の調査結果によると史跡指定地の台地上には人工草地が分布し、尖石遺跡と与助尾根遺跡間の谷部にはハンノキ群落、与助尾根遺跡台地には人工草地と中径のクリーコナラ群落、青少年自然の森にはカラマツ植林主体となるが、尾根部に大径のクリーコナラ群落、森林計画地でもカラマツ植林、ハリエンジュ群落が認められる。

(2) **動物・鳥類・昆虫類** 動物は両生類、爬虫類、哺乳類の生息状況について調査を行い、両生類 3 種、爬虫類 2 種、哺乳類 9 種が確認されている。鳥類は 10 目 27 科 52 種が確認されている。昆虫類は 14 目 135 科 462 種が確認されており、全体的に豊かな生物環境にあると言え、中には絶滅危惧種に指定されているものも含まれている。

(3) **水文環境** 尖石遺跡と与助尾根遺跡間に形成されている谷部の湧水について、この湧水の水源が滝之湯堰から漏れた水ではないかとの指摘があり、湧水と用水路流水との関係を確認するために水質検査を実施した。水質調査は谷部小流水で 4 ヶ所、滝之湯堰 1 ヶ所、滝之湯堰から分水する雑司久保堰に 1 ヶ所、滝之湯堰から分水する小堰に 1 ヶ所に於いて水温・溶存酸素量・濁度・流量等について調査した結果、谷部小流水と滝之湯堰・堰分水の秋季水温差で 4℃ 堰の方が高く、冬季堰水路が止水されている状態でも谷部小流水は秋季と同量の水が認められ、谷部小流水は滝之湯堰からの漏れた水ではないことが確認できた。

(守矢昌文)

第8節 遺物の自然科学分析

1. 出土資料の自然科学分析の導入

宮坂英式が出土資料に対して自然科学分析を専門家に依頼し行っている事例が、昭和17年と昭和21年の2例がみられる。

まず、昭和17年に骨の鑑定について実施している。

出土遺跡・出土遺構、骨の部位、状況は不明ではあるが、昭和17年11月9日付千葉醫科大學解剖學教室教授小池敬事からの書簡によると

「(前略) 骨片は目下教室員命じて研磨標本をつくらせてあります。(中略) 日本先史時代の研究は益々重大なる意義を有するものと思はれます。眞實の郷土史はそれから研究をはじめなければなりません。その節御地は非常に興味深い地方と考えられます。人骨の出土を一日も早く期待して居ります。(後略)」(文献:75)

とあり、宮坂英式が解剖学者に骨の鑑定を依頼しその種別を判断しようとしていることがわかる。

この結果について昭和18年3月4日千葉醫科大學長小池敬事から分析報告書と検査結果が下記のように伝えられている。

「(前略) 御御依頼のもの、検査が終了しましたから御知らせいたします。本學の藥專湊教授に私から御願ひ、化學的検査して頂きました結果、御送りのものは哺乳類の骨を確認された次第です。報告書を同封して送りますから御覧下さい。(下略)」(文献:76)

と鑑定依頼を受けた骨の鑑定結果を哺乳類の骨であると報告している。

この鑑定結果を宮坂はその後どのようにしたか資料は残されていないが、昭和17年当時宮坂英式が縄文時代の食生活復元を行おうとしていた意図を読み取ることができる。

また、昭和8年8月13・14日の調査記録には、住居址内に設けられた貯蔵穴と思われる土坑内の覆土中に多量の炭化物が含まれ、これを詳細に観察するとシンダミまたはドンダミの二つ割のものや30個を超える完全な個体を得ており、「石器時代人の食料として採集したものであろう。」と所見を述べ、本書内に「尖石縄文人の食生活」の項を起し食生活の復元を行っている(文献:77)。

昭和26年5月中原遺跡で発掘調査を行い、第3号住居址から出土した獣骨鑑定を早稲田大学理工学部講師直良信夫に依頼し、その成果に基づき「石器時代の食生活—八ヶ岳西山麓出土資料の検討—」(文献:78)に於いて縄文時代の食生活と狩猟の復元を行っている。

また、昭和21年から与助尾根遺跡の発掘調査に着手した際、昭和22年第117号(与4号-S22)住居址内南側に蓋石のある埋甕が検出されている。この埋甕内の黒土を東京大学人類学教室助教授渡辺直経に分析依頼をし、単なる腐植土であったとの結果を得ている(文献:1p)。

この埋甕内土の分析は、埋甕の性格を探る手だとして化学分析を用いたもので、その後の埋甕内容物について具体的成果を求めようとしていたと思われる。

発掘調査により得られた資料を科学分析することで、遺構等の性格や食生活を復元しようとする宮坂の取り組みは、当時として先駆的な取り組みとして評価することができる。

(守矢昌文)

第5章 調査の成果

2. 自然科学分析について

茅野市内遺跡出土資料を対象とする先行分析例との比較

今回の総括報告書作成にあたって、第78図に示した土器3点の土器付着物の炭素・窒素安定同位体分析、9点の黒曜石製石器の産地推定分析を実施した。分析についての報告は337ページ以降の別編2にあるので参照されたい。これらの結果との比較のため、過去に茅野市内の縄文時代遺跡から出土した資料を対象として過去に実施された自然科学的分析結果を、示しておきたい。



第78図 尖石遺跡及び与助尾根遺跡出土 炭素・窒素安定同位体分析実施資料

(1) 炭素・窒素安定同位体分析

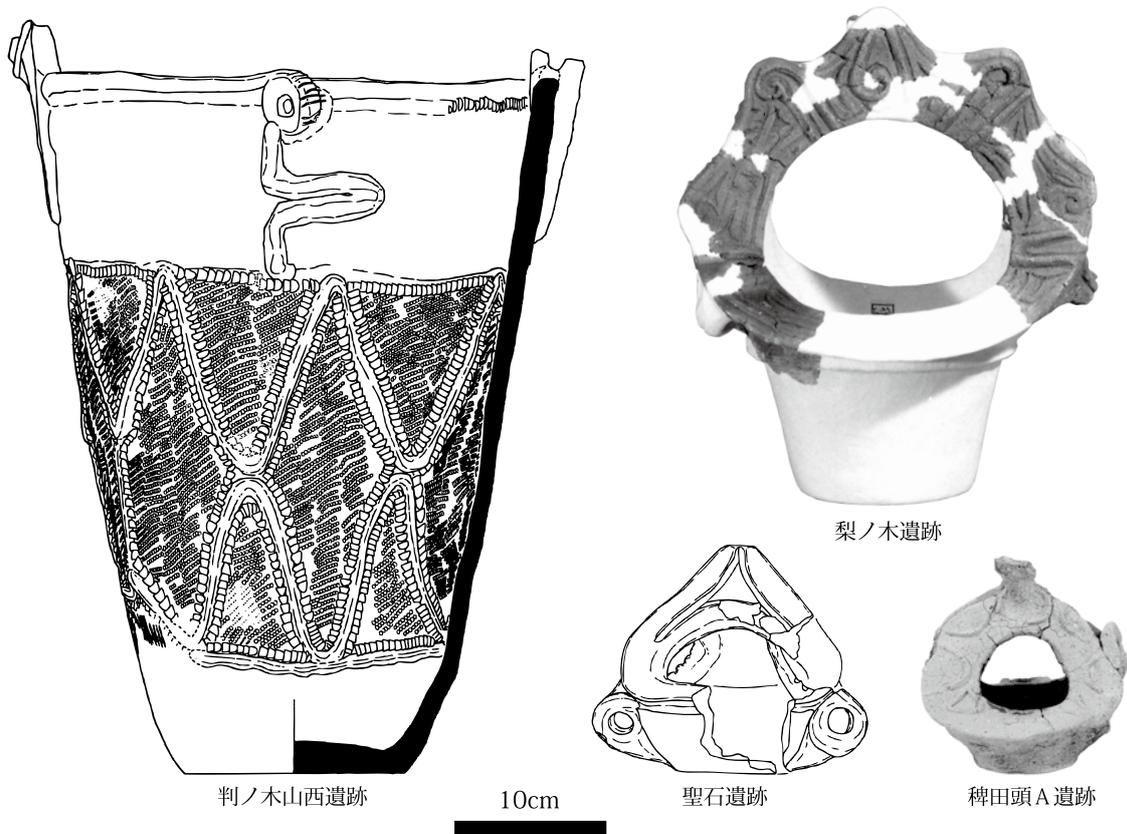
水尻遺跡、高風呂遺跡から出土した加工食品と思われる炭化物、そして判ノ木山西遺跡の深鉢形土器内面に付着していた炭化物、また聖石遺跡、梨ノ木遺跡、稗田頭 A 遺跡出土の吊手土器内面に付着した炭化物について、中村耕作氏と國木田大氏によって炭素・窒素安定同位体分析が実施された(文献:79・80・81)。その結果は第79図に示した。なお、梨ノ木遺跡と稗田頭 A 遺跡出土の吊手土器の内面付着炭化物の窒素 15 は測定できなかったとのことである。

今回新たに実施した土器3点についての分析結果を先行分析例と合わせてみたときに、器種によってやや傾向が異なるように見えるので、クッキー状炭化物と吊手土器の内面付着物と、深鉢形土器の内面付着物とに分けて記してみる。

(1)-1 クッキー状炭化物と吊手土器内面付着炭化物

クッキー状炭化物と吊手土器内面付着炭化物は、深鉢形土器の内面付着炭化物よりも高い C/N 比が特徴であると言えそうである。吉田邦夫氏による実際の食材を用いた炭化物の炭素・窒素安定同位体分析の基礎実験の結果にもとづくと(文献:82・83)、C/N 比が30を超える堅果類の範囲に高風呂遺跡以外の炭化物がすべて含まれる。C/N 比が26.2の高風呂遺跡についても、堅果類のデンプンを主成分にしている可能性が高いとされる(文献:81)。

とりわけ梨ノ木、稗田頭 A 両遺跡の吊手土器の C/N 比はそれぞれ45.5、43.2とクッキー状炭化物より高い値を示している。今回新たに分析した試料 No. 3 の与助尾根遺跡の吊手土器は、そこまで C/N 比が高くないとはいえ、C/N 比33.8でC3植物と推定する結果となっている。この高い C/N 比からみて、吊手土器内面に付着した炭化物はC3植物でもデンプンを主成分とするものに由来と考えてよさそうである。



出土遺跡	出土遺構等	試料 時期／器種と採取箇所	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{Air}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
水尻遺跡	第1号住居址	クッキー状炭化物 中期中葉	-25.1	2.1	64.5	2.1	36.3
高風呂遺跡	第21号住居址	クッキー状炭化物 中期後葉	-25.1	1.1	62.9	2.8	26.2
判ノ木山西遺跡	第7号住居址	土器附着鱗茎類炭化物 中期中葉／深鉢形土器底部付近内面	-24.9	3.0	64.3	1.7	43.3
聖石遺跡	SB07	土器附着炭化物 中期中葉／吊手土器内面上半部	-27.1	6.0	68.1	2.4	32.9
梨ノ木遺跡	包含層	土器附着炭化物 中期後葉／吊手土器内面	-27.0	-	58.0	1.5	45.5
稗田頭A遺跡	第38号住居址	土器附着炭化物 中期後葉／吊手土器内面	-26.6	-	66.8	1.8	43.2

(國木田2011、中村2011、中村・國木田2012より)

第79図 茅野市内の縄文時代遺跡出土資料の炭素・窒素安定同位体分析

(1)-2 深鉢形土器

深鉢形土器については、試料 No.2 (尖石遺跡 III 区 A5e1 グリッド出土土器) は C/N 比が 13.2 となっており、吊手土器と比べて低い値となった。分析報告のとおり、より詳細に原料を特定するには別に分析をすることが有効と思われる。試料 No.1 (同 IV 区 M5c4 グリッド出土土器) は C/N 比では 28.5 で堅果類に近い値を示す。ただし、炭素 13 と窒素 15 の判別図では草食動物の範囲にプロットされている。試料 No.2 と合わせ、今後別に分析をすることで、由来をより詳しく検討できる情報を得られるかもしれない。

深鉢形土器で気になるのは、判ノ木山西遺跡である。この土器の付着炭化物は、顕微鏡観察で鱗莖類とされているが (文献:84)、吉田氏の実験ではノビルの土器内面炭化物の C/N 比は 13.0 であり、かなり C/N 比が異なっている。判ノ木山西遺跡の試料を分析した國木田氏もこの点については注意をしており、下宅部遺跡の事例も同様の傾向であることから、分析を増やすこととユリ科鱗莖類のデンプンについて注目して分析する必要性を説いている (文献:81)。同シンポジウムでは中沢道彦氏もこの判ノ木山西遺跡の付着物に触れ「球根類が密集して土器に付着するには (中略) 何らかの澱粉質の「つなぎ」がないと密集する状態にならないことが実験で判明している」と指摘し、ノビルが調理工程でエグミ除去を目的として利用されたり、その旬の時期から堅果類の貯蔵量が減る端境期の多様な食料利用を示したりするのではないかと述べている (文献:84)。

いずれにしても、吊手土器が堅果類のデンプンを主成分にしている可能性が高い結果を示すのとは対照的に、深鉢形土器の内面付着炭化物はそこまで特定できるほどではない。分析点数が多いわけではないものの、吊手土器の内面付着炭化物と深鉢形土器の内面付着炭化物にはそのような若干の違いがある。儀礼に用いられたと考えられてきた吊手土器については、ある特定のものを燃焼させると決まっていた可能性を思わせる。

(2) 黒曜石製遺物の産地推定分析

今回、尖石遺跡の中期後葉曾利 IV 式の住居址から出土した石器から 9 点を選択してエネルギー分散型蛍光 X 線分析を実施した結果、9 点すべてが諏訪星ヶ台群と判別された。別編 2 第 2 節表 1 に分析対象石器を示しているが、その表にしたがって器種を記すと、分析 No.1 は原石素材のスクレイパー、No.2 は石鏃、No.3 は二次加工のある剥片、No.4 は灰白色の流離構造が視認できる原石、No.5 は二次加工のある剥片、No.6 は石鏃、No.7 はピエスエスキュー、No.8 は剥片素材のスクレイパー、No.9 は石核である。スクレイパーはいずれも刃部が鋸歯縁状となっている。

これらが出土した住居址から出土した剥片石器は第 24 表のとおりである。赤チャート製の石鏃が 1 点あるほかはすべて黒曜石である。肉眼的には 9 点の分析資料と大きく異なる特徴をもつものはない。正確には全点分析をしたうえで論じる必要があるが、こうした肉眼で確認できる特徴からほとんどが諏訪星ヶ台群に判別されると予想される。

縄文時代全体を通じて、関東中部の遺跡から出土する黒曜石の産地推定分析では諏訪星ヶ台群が多数を占

第 24 表

石鏃	スクレイパー	二次加工または 微細剥離のある剥片	その他二次加工の ある石器破片	ピエスエスキュー (削片)	ピエスエスキュー (本体)	石核	剥片	原石・ 原石片
3	2	22	6	24	28	14	232	12

合計 343

第25表
早期遺跡の黒曜石産地推定分析

(早期中葉)

	SWHD	TSTY	TSHG	合計
馬捨場	6	42	1	49

馬捨場は望月 2002、高風呂は守矢ほか 1986、駒形は小林ほか 2007、構井・阿弥陀堂は藤原 2008 より作成。

(早期末)

	和田峠・ 丁字御料	星ヶ塔・ 星ヶ台	合計
高風呂	5	3	8

小林秀行・賛田明 2007『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 駒形遺跡』(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
藤原直人 2008『(都) 大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 構井・阿弥陀堂』(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

前期遺跡の黒曜石産地推定分析

(前期初頭)

	和田峠・ 丁字御料	星ヶ塔・ 星ヶ台	合計
高風呂	3	15	18

望月明彦 2002「第2節 茅野市馬捨場遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 馬捨場遺跡』、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、149 - 158 頁
守矢昌文・鶴飼幸雄 1986『高風呂遺跡 一昭和 59 年度県営圃場整備事業湯川地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』、茅野市教育委員会

(前期前葉)

	SWHD	TSTY	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDTM	WDHY	WOBD	WOTM	AGKT	不可	合計
駒形	6087	274	1153	72	93	142	68	16	9	67	1	213	8195
構井・阿弥陀堂	45	0	11	3	0	0	0	0	0	0	0	1	60

(前期末)

	SWHD	合計
駒形	25	25

第26表
中期遺跡の黒曜石産地推定分析

(中期初頭)

	西霧ヶ峰系	測定不可	合計
新井下	217	13	230

新井下、中ツルネ、福沢中原は杉原ほか 2006、長峯、聖石は望月 2005、構井・阿弥陀堂は藤原 2008 より作成。なお長峯についてはデータCD編収録エクセルファイルにもとづき細別時期不明のSB184 の2点、時期不明のSH3等出土資料計 120 点の合計 122 点はこの表に含んでいない。

	SWHD	TSTY	TSHG	WDTY	WDKB	WDTK	WDTN	WDHY	不可	合計
長峯	123	21	1	4	1	4	1	1	7	163
馬捨場	52	19							1	72

(中期中葉)

	西霧ヶ峰系	和田・鷹山系	男女倉系	冷山・麦草峠系	測定不可	合計
中ツルネ	166	8	1	1	10	186

	SWHD	TSTY	TSHG	WDTY	WDKB	WDTM	WDTK	WDHY	WOBD	WOTM	KZOB	不可	欠番	合計
長峯	594	103	2	24	6	1	7	7	1	2	2	12	1	762
駒形	20			4								1		25

(中期後葉)

	西霧ヶ峰系	和田・鷹山系	男女倉系	冷山・麦草峠系	測定不可	合計
福沢中原	300	2	2	1	16	321

	SWHD	TSTY	TSHG	TSSB	WDTY	WDKB	WDTN	WDTK	WDTM	WOTM	不可	合計
尖石	9											9
長峯	352	14			1	2	1	1	0	1	3	375
聖石	599	33	1	3	17	2	3	3	1	0	6	668
構井・阿弥陀堂	12	3			2							17

杉原重夫・鈴木尚史・藤森靖枝 2006「長野県尖石考古館所蔵縄文時代黒曜石遺物の産地推定」『新尖石縄文考古館開館 5 周年記念考古論文集』、茅野市尖石縄文考古館、89 - 108 頁
藤原直人 2008『(都) 大年線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 構井・阿弥陀堂』(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
望月明彦 2002「第2節 茅野市馬捨場遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書 馬捨場遺跡』、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、149 - 158 頁
望月明彦 2005「第4節 長野県茅野市聖石遺跡・長峯遺跡出土黒曜石産地推定結果」『担い手育成基盤整備事業芹ヶ沢地区国道 299 号線バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 聖石遺跡 長峯遺跡 別田沢遺跡』、(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、173 - 178 頁

め、山梨県や関東南部では神津島の各群に判別される黒曜石が、新潟県では新潟県内の各群に判別される黒曜石が加わる傾向が、静岡県では神津島や箱根の各群に判別される黒曜石がより多くなる(文献:85)。今回の分析結果はこの傾向に合致したものと言える。

黒曜石の産地推定分析も、過去に茅野市内の縄文時代遺跡からの出土資料を対象に実施した例がある。それらの分析では、分析数が必ずしも多いわけではないうえに、分析者がすべて同じではなく同じ EDXRF

第5章 調査の成果

第27表

後期遺跡の黒曜石産地推定分析

(後期初頭～前葉)

	SWHD	TSTY	WDTY	不可	合計
長峯	31	3	2	1	37

(後期中葉)

	SWHD	不可	合計
駒形	49	1	50

晩期遺跡の黒曜石産地推定分析

(晩期後葉)

	SWHD	WDTY	合計
御社宮司	59	2	61

長峯は望月 2005、駒形は小林ほか 2007、御社宮司は馬場ほか 2006 より作成。なお長峯のデータ CD 編のエクセルファイルで時期・小区分が中期後葉 5～後期初頭とされた SK601 の 10 点は中期後葉に含めている（上記表には計上していない）。

小林秀行・費田明 2007『県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 駒形遺跡』、新潟県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター
 馬場伸一郎・望月明彦 2006『中部高地の弥生時代を中心とした黒曜石産地組成とその推移について』、『長野県考古学会誌』115 号、長野県考古学会、1 - 28 頁
 望月明彦 2005『第 4 節』長野県茅野市聖石遺跡・長峯遺跡出土黒曜石産地推定結果』『担い手育成基盤整備事業芹ヶ沢地区国道 299 号線バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 聖石遺跡 長峯遺跡 別田沢遺跡』、新潟県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター、173 - 178 頁

でも判別群の呼称が異なるうえに、高風呂遺跡はフィッシュン・トラック分析となっているが、早期から晩期まで分析している。ここで、それらの分析について時期ごとに表としてまとめておく（第 25～27 表）。

これらの結果を見ると、地理的に八ヶ岳に近いゆえか、蓼科冷山群に判別される黒曜石が存在感を示していることが改めて認識できる。2013 年時点の産地推定分析の集成（文献:85）で、他県や茅野市外の縄文時代の資料を対象とする分析結果を見ても、茅野市域の遺跡で蓼科冷山群に判別される資料が多いように見受けられる。今後、218 号住居址出土資料の全点分析や、棚畑遺跡、中ッ原遺跡、梨ノ木遺跡出土資料の産地推定分析を進めることで、そのような判別群の構成を示すのかどうか、またそのような判別群の構成をする理由を考えるうえでの手がかりを得ることができるとも考えられる。

(山科 哲)

注 釈

- 注:1 ピンク色網掛宮坂英式報告中住居址未認定。緑色網掛炉址や住居址痕跡未確認で住居址未認定。
- 注:2 宮坂英式は『尖石』『住居址総観』の中で「然し中には、尖石遺跡の第一七址・第三三址のようにその面が軟弱で、しかも凹凸の状態にある床面もある。これは住居の日時が比較的浅いためであろうかと考えられる。」としている。
- 注:3 原文では「石圍爐の住居址第三群は最後のものとし、竪坑爐の第二群に先行するものと假定される。」と書かれているが、前段からの文脈で考えると「石圍爐の住居址第三群は最後のものとし、竪坑爐の第二群が先行するものと假定される。」の誤字かと考えられる。
- 注:4 黄色塗は縄文時代前期を示し、赤字は建替え有、青字は建替え・複数炉址所有を示す。
- 注:5 土坑の平面プランについては、調査報告書の記載に従った。規模については、報告書記載実測図を計測し、深さについては調査報告書記載数値とした。また、断面形は調査報告書記載を基本としたが、新たな視点で再分類してある。
- 注:6 尖石遺跡・与助尾根遺跡等宮坂英式が調査の遺構測量に係わった矢島数由が書き残した私製版和綴本で、このほかに『塚墓考之巻』『古文考』『遺蹟考之巻』『碑文考之巻』『城塞考之巻』『古墳考之巻』『建築考之巻』『奥出考之巻』『寺院考之巻』『銘文考之巻』『鐘録考之巻』『棟札考之巻』『古院考之巻』『神社考之巻』『人物考之巻』『碑塔考』『史前□□考』の合計 18 冊に亘る矢島の郷土史に関する調査記録集である。
- 注:7 宮坂英式により昭和 32 年 12 月尖石遺跡・与助尾根遺跡調査報告書『尖石』が刊行されたが、「小平幸衛氏の発掘」の項内では地点 XI までの記載はあるが、地点 XII の記載は見られない。
- 注:8 尖石遺跡・与助尾根遺跡調査報告書『尖石』内折込図版一覧「尖石遺跡発掘竪穴住居址分布図（二二五分ノ一）」の原図「尖石遺跡発掘竪穴住居址分布図（九十分ノ一）」（尖石遺蹟・与助尾根遺蹟関連原稿・図面・日記・書簡類資料収蔵目録）

録 原稿等番号 360) に基づき計測した。

- 註:9 大正 11 年八幡一郎が紹介した土偶は、現在東京大学総合研究博物館に、昭和 5 年両角守一が紹介した土偶は株式会社東洋観光で、昭和 5 年今井弘樹発表遺物写真の一部、昭和 7 年宮坂英式が紹介した顔面把手は財団法人片倉館に所蔵されている。昭和 15 年から昭和 16 年までの尖石遺跡出土土器は、財団法人片倉館所蔵(破片も含む)で 81 点、昭和 17 年以降の尖石遺跡、与助尾根遺跡出土土器 89 点が残されていた。
- 註:10 図版 25「中尾根石囲炉址出土鏝状口縁」「第六址出土土器」、図版 28「与助尾根第七址石壇周囲出土遺物—上段左・中段右」、図版 33「3. 第一四址出土・4. 第一四址出土・5. 第一一址出土」、図版 44「与助尾根各址出土土器—上段左・中段左・下段左」等の土器の所在が不明である。
- 註:11 与助尾根南遺跡、竜神平下遺跡を遺跡周辺の遺跡として捉えるが、場合によっては竜神平遺跡も関連の遺跡として取り扱う。
- 註:12 平成 5 年調査時Ⅱ区 E6e3 尖石遺跡第 163 号(遺 5-H8) 住居址調査者談で、写真・図面等の記録はない。
- 註:13 昭和 5 年 10 月今井弘樹により出版された私製版『尖石遺跡発掘記』写真図版第 18 図には「VW 辺より発掘」と、報告書『尖石』図版 25 には「中尾根石囲炉址出土鏝状口縁」として与助尾根南遺跡第 150 号(炉 1-S25) 出土の有孔鏝状土器の写真が掲載されている。
- 註:14 八幡一郎は大正 11 (1922) 年 8 月「信濃諏訪郡豊平村廣見発見の土偶」『人類學雑誌』第 37 卷第 8 號 274 頁で「(前略) なほ先年同氏は大なる香爐様の土器を得られたがその周囲にも石があつたと云う。(後略)」の記述から類推した。
- 註:15 両角守一の昭和 5 年 1 月「伏見宮博英殿下に御伴して諏訪郡遺跡を尋ねる(附) 堅穴式土室の研究」『史前學雑誌』第 2 卷第 1 號の文中では土偶出土地を廣畑と表記し、この土偶を昭和 4 年 7 月 23 日湖東小學校で伏見宮が実見した旨が記されているが、宮坂英式は昭和 43 年 5 月「土偶の発見」『尖石 八ヶ岳山麓に眠る縄文文化の謎をとく』學生社版でこの土偶について「(前略) もう一つ妊婦坐像がある。昔、一村民が偶然にも尖石遺跡から発見して村医に贈り(後略)」とこの妊娠坐像土偶を写真入りで紹介している。この記述に従い本土偶を尖石遺跡からの出土品とした。
- 註:16 尖石遺跡での石で囲まれた土偶の発表は、後の群馬県吾妻町郷原遺跡、山形県遊佐町杉沢遺跡などの石で囲まれた土偶の解釈へ大きな影響を与えたものと考えられる。
- 註:17 空堀、内で発掘調査が行われていないことを『尖石遺跡発掘記』「第二圖尖石遺跡地の一部 B 地点より東をのぞむ」の写真図版からも確認できる。
- 註:18 遺跡環境復元に係る自然科学的調査の調査データや詳細な成果については、「附編 自然科学的調査」『特別史跡尖石遺跡—平成 7 年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』や「別編 (1)植物 (2)動物 (3)水分環境」『特別史跡尖石石器時代遺跡保存管理計画書』に記載されているので、採録せず、本節では自然科学調査結果の概略を記述した。なお、史跡整備基本計画の植栽計画に関わる植生復元や、修景緑化や具体的な植栽計画の基礎資料としての調査報告書は平成 9 (1998) 年 3 月『特別史跡尖石遺跡—特別史跡尖石遺跡整備基本計画の植栽計画にかかわる植生調査報告書—』茅野市教育委員会が刊行されている。

参考引用文献・引用資料

- (文献:1a) 宮坂英式 昭和 32 (1957) 年 12 月「住居址の総観」『尖石』茅野町教育委員会 217 頁—245 頁
- (文献:2a) 小林深志 平成 19 (2007) 年 3 月「第 2 表 尖石遺跡周辺住居址一覧表」『尖石遺跡整備報告書 (2)—尖石地区試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 39—41 頁
- (文献:3) 宮坂英式 昭和 17 (1942) 年 4 月「八ヶ岳西麓石器時代の住居址」『信濃』4 月號 信濃史學會 23—44 頁
- (文献:4a) 宮坂英式 昭和 23 (1948) 年 8 月「昭和十五年發掘尖石遺蹟住居址集成」『原住民族の遺蹟—八ヶ岳山麓尖石遺

第5章 調査の成果

蹟研究一』 蓼科書房 41-46 頁

- (文献:1b) 宮坂英式 昭和 32 (1957) 年 12 月「住居址の総観」『尖石』茅野町教育委員会 217・218 頁
- (文献:5) 八幡一郎 昭和 9 (1934) 年 6 月「東京人類學會創立五十年記念講演會記事 40. 日本石器時代の住居型式」『人類學雜誌』第 49 卷第 6 號 東京人類學會 24-26 頁
- (文献:6) 後藤守一 昭和 15 (1940) 年 9 月「上古時代の住居」『人類學・先史學講座』第 17 卷 雄山閣
- (文献:1c) 宮坂英式 昭和 32 (1957) 年 12 月「住居址の総観」『尖石』茅野町教育委員会 221 頁
- (文献:7a) 宮坂英式 昭和 11 (1936) 年 12 月「八ヶ岳山麓尖石遺跡發掘爐の二型式」『考古學』第 7 卷第 10 號 東京考古學會 466-477 頁
- (文献:7b) 宮坂英式 昭和 11 (1936) 年 12 月「八ヶ岳山麓尖石遺跡發掘爐の二型式」『考古學』第 7 卷第 10 號 東京考古學會 467-470 頁
- (文献:8) 上野廣一・宮坂英式 昭和 11 (1936) 年 12 月「土器焼成に關する一考察と其の資料」『ミネルヴァ』12 月號第 1 卷第 8 號 翰林書房 8-16 頁
- (文献:9a) 宮坂英式 昭和 25 (1950) 年 11 月「八ヶ岳西山麓與助尾根先史聚落の形成についての一考察(下)」『考古學雜誌』第 36 卷第 4 號 日本考古學會 49 頁
- (文献:10) 宮坂英式 昭和 25 (1950) 年 1 月「石器時代の信仰生活」『清陵地歴部報』第 2 號 地歴部編集室 3-7 頁
- (文献:11) 宮坂英式 昭和 25 (1950) 年 11 月「八ヶ岳西山麓與助尾根先史聚落の形成についての一考察(下)」『考古學雜誌』第 36 卷第 4 號 日本考古學會 51 頁
- (文献:1d) 宮坂英式 昭和 32 (1957) 年 12 月「住居址の総観」『尖石』茅野町教育委員会 236 頁
- (文献:1e) 宮坂英式 昭和 32 (1957) 年 12 月「住居址の総観」『尖石』茅野町教育委員会 237・238 頁
- (文献:13) 宮坂英式 昭和 17 (1942) 年 11 月「四、聚落の復原」『尖石遺蹟に就て(發掘報告要項)』7 頁
- (文献:14) 宮坂英式 昭和 21 (1946) 年 12 月「尖石先史聚落址の研究(梗概) 一日本石器時代中部山岳地帯の文化一」『考古學特輯號』會報 3 號 諏訪史談會 24 頁
- (文献:15) 鶴飼幸雄 平成 (2017) 年 1 月「尖石縄文集落の墓域における立柱祭祀の様相」『長野県考古学会誌』153 号 長野県考古学会 114-135 頁
- (文献:16) 小林深志 平成 16 (2004) 年 3 月「第 2 節検出された遺構 土坑群」『尖石遺蹟一平成 15 年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書一』茅野市教育委員会 32 頁
- (文献:17a) 柳澤 亮 平成 17 (2005) 年 1 月「第 3 章聖石遺跡 第 2 節縄文時代の遺構 8 土坑」『担い手育成基盤整備事業(芹ヶ沢地区) 国道 299 号線バイパス建設事業埋藏文化財發掘調査報告書 聖石遺跡・長峯遺跡・(別田沢遺跡)』長野県諏訪地方事務所 長野県諏訪建設事務所 長野県茅野市 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋藏文化財センター 43 頁
- (文献:18) 宮坂英式 昭和 17 (1942) 年 11 月「石器時代の謎を語る一我々の祖先はそこで如何なる生活を營んでゐたか一」『科學畫報』31 卷 11 號 誠文堂新光社 47 頁
- (文献:19a) 矢島数由 昭和 28 (1953) 年 1 月「尖石列石群址」『如雲諏方史抄 堅穴考』矢島私製版 64・65 頁
- (文献:20) 小池岳史 平成 6 (1994) 年 3 月「Ⅲ 發掘された遺構と遺物 1 縄文時代の遺構と遺物 (4) 配石遺構」『立石遺蹟一平成 5 年度県営圃場整備事業掘地区に伴う埋藏文化財緊急發掘調査報告書一』茅野市教育委員会 98 頁
- (文献:21a) 今井弘樹 昭和 5 年 10 月「尖石遺蹟地圖 其之」『尖石遺蹟發掘記』今井私製版
- (文献:22) 宮坂英式 昭和 17 (1942) 年 11 月「石器時代の謎を語る一我々の祖先はそこで如何なる生活を營んでゐたか一」『科學畫報』31 卷 11 號 誠文堂新光社 48・49 頁

- (文献:1f) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「昭和十七年度の発掘」『尖石』茅野町教育委員会 92頁
- (文献:23a) 小林深志 平成6(1994)年3月「第3節遺構外の遺物」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 19頁
- (文献:23b) 小林深志 平成6(1994)年3月『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会
- (文献:24a) 鶴飼幸雄・小林深志・守矢昌文 平成3(1991)年3月『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会
- (文献:25a) 小林深志 平成9(1997)年3月『国特別史跡 尖石遺跡—平成8年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会
- (文献:24b) 鶴飼幸雄 平成3(1991)年3月「第3節確認された遺構と出土遺物の概要」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 10頁
- (文献:26a) 小林健治 平成5(1993)年3月「第IV章まとめ」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 14頁
- (文献:27) 小林深志 平成8(1996)年3月「第2節遺物」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 16頁
- (文献:25b) 小林深志 平成9(1997)年3月「第2節調査経緯」『国特別史跡 尖石遺跡—平成8年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 2頁
- (文献:28a) 今井弘樹 昭和6(1931)年1月「諏訪郡尖石遺跡の発掘について」『信濃考古學會誌』第二年第五・六輯 信濃考古學會 147・148頁
- (文献:23c) 小林深志 平成6(1994)年3月「第2節調査の経過」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 3・4頁
- (文献:24c) 鶴飼幸雄 平成3(1991)年3月「第2節遺構外出土の遺物」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 20頁
- (文献:26b) 小林健治 平成5(1993)年3月「第2節遺物」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 10頁
- (文献:1g) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「第三次発掘(昭和二十四年)」『尖石』茅野町教育委員会 186・187頁
- (文献:19b) 矢島数由 昭和28(1953)年1月「與助尾根特殊第一號遺蹟」『如雲諏方史抄 堅穴考』矢島私製版 102・103頁
- (文献:29) 小林深志 平成6(1994)年3月「第2節 平安時代」『与助尾根南遺跡—埋蔵文化財センター(仮称)建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』茅野町教育委員会 11・12頁
- (文献:30) 宮坂光昭 昭和60(1985)年7月「三 再び無住化する山麓の村」『原村誌』上巻 原村役場 463頁
- (文献:31) 諏訪教育會 諏訪史談會 昭和15(1940)年秋『尖石遺蹟に就て』7—11頁
- (文献:32) 宮坂英弼 昭和21(1946)年12月「尖石先史聚落址の研究(梗概)—日本石器時代中部山岳地帯の文化—」『考古學特輯號』會報3號 諏訪史談會 22・23頁
- (文献:33) 戸澤充則 昭和25(1950)年1月「與助尾根発見の新資料」『史実誌—尖石・与助尾根特輯号』4史実會 13—15頁
- (文献:34) 鶴飼幸雄 昭和55(1980)年2月「第IV章 遺物 第1節 土器」『与助尾根南遺跡』茅野市教育委員会 23頁
- (文献:35) 吉江邦彦・守矢昌文 昭和50(1975)年「竜神池遺蹟」『かやの』創刊号 茅野高社会科考古班 9—13頁
- (文献:36) 守矢昌文 平成24(2012)年1月「茅野市龍神平遺跡採集の土器について—縄文時代早期末絡条体圧痕文土器の再提示—」『会報』No.87 諏訪考古学研究会 7—10頁

第5章 調査の成果

- (文献:37) 寺内隆夫 昭和61(1986)年3月「縄文時代中期中葉土器の分類と検討—異系統土器との関係を中心として—」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会 456—458頁
- (文献:38) 柳川英司 平成7(1995)年3月「第3節 検出された遺物」『菖蒲沢A遺跡—平成6年度県営圃場整備事業掘地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』茅野市教育委員会 11・12頁
- (文献:39) 柳川英司 平成8(1996)年3月「第3節 出土した遺物」『菖蒲沢A遺跡—平成7年度県営圃場整備事業掘地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—』茅野市教育委員会 27・28頁
- (文献:40) 佐藤信之 昭和57(1982)年3月「1)土器の分類(2)阿久Ⅱ期」第3節 出土土器の検討 2)阿久Ⅱ期『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5 昭和51・52・53年度—』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 44頁・267—272頁
- (文献:41) 山本典幸 平成20(2008)年6月「五領ヶ台式土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 379・380頁
- (文献:42) 今福利恵 平成11(1999)年3月「(7)中期初頭(五領ヶ台式土器)」『山梨県史』資料編2 原始・古代 山梨県 359頁
- (文献:43) 泉 拓良 平成20(2008)年6月「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 505頁
- (文献:44) 伴 信夫 昭和51(1976)年3月「6 大石遺跡 SOIB 5)大石遺跡に関する考察 カ)縄文中期前半における移入土器 (ii)関西系」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市・原村その1、富士見町その2』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 99・100頁
- (文献:45) 山口逸弘 平成20(2008)年6月「新巻・焼町系土器」『小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション 404・405頁
- (文献:46) 神村 透 昭和61(1986)年5月「下伊那型楕形文土器」『長野県考古学会誌』51号 長野県考古学会 49—64頁
- (文献:47) 守矢昌文 平成25(2013)年10月「諏訪地域に於ける縄文時代中期の土器群構成とその分布」『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集 文化の十字路口 信州』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会 181—185頁
- (文献:48) 守矢昌文 平成2(1990)年12月「第1節 棚畑遺跡に於ける縄文土器群の構成について 3 縄文中期土器群の構成」『棚畑』茅野市教育委員会 647頁
- (文献:21b) 今井弘樹 昭和5(1930)年10月「第十八圖 VW 辺より發掘」『尖石遺跡發掘記』私製版
- (文献:1h) 宮坂英式 昭和32(1957)年12月「中尾根石囲炉址出土鏢状口縁」『尖石』茅野町教育委員会 図版25
- (文献:49) 長沢宏昌 平成15(2002)年5月「2孔1単位の小孔を有する有孔鏢付土器」『新世紀の考古学—大塚初重先生喜寿記念論文集—』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会 103—118頁
- (文献:50) 鶴飼幸雄 平成2(1990)年12月「1 竪穴住居址 第11号住居址」『棚畑』茅野市教育委員会 65・66頁
- (文献:51) 武藤雄六 昭和40(1965)年7月「7 藤内特殊遺構」『井戸尻—長野県富士見町における中期縄文時代遺跡群の研究—』栗本和夫 中央公論美術出版 27頁
- (文献:52) 福島 永 平成10(1998)年3月「2 単独埋設土器」『新町大原遺跡 縄文中期中葉の集落址』辰野町教育委員会 101頁
- (文献:53) 山田武文 平成8(1996)年3月「(10)14号住居址」『郷土の文化財19 花上寺遺跡』岡谷市教育委員会 49・50頁
- (文献:54) 宮坂英式 昭和9(1934)年1月「長野縣尖石遺跡發掘手記」『ドルメン』第三卷第一號 岡書院 46頁

- (文献:55a) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「圖版三十」『諏訪史』第一卷 信濃教育會諏訪部會 圖版30
- (文献:55b) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「一〇 豊平村南大鹽廣見^{とがりいし}尖石遺跡」『諏訪史』第一卷 信濃教育會諏訪部會 45頁
- (文献:56a) 八幡一郎 大正11(1922)年8月「信濃諏訪郡豊平村廣見發見の土偶」『人類學雜誌』第37卷第8號 日本人類學會 270・271頁
- (文献:56b) 八幡一郎 大正11(1922)年8月「信濃諏訪郡豊平村廣見發見の土偶」『人類學雜誌』第37卷第8號 日本人類學會 274頁
- (文献:55c) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「土偶 豊平村廣見尖石發見第一號土偶」『諏訪史』第一卷 信濃教育會諏訪部會 198頁
- (文献:57) 兩角守一 昭和5(1930)年1月「伏見宮博英殿下に御伴して諏訪郡遺跡を尋ねる(附)堅穴式土室の研究」『史前學雜誌』第2卷第1號 史前學會 63・64頁
- (文献:1i) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「小平幸衛氏との発掘」『尖石』茅野町教育委員会 24・25頁
- (文献:1j) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「第三次発掘(昭和二十四年)」『尖石』茅野町教育委員会 164頁
- (文献:58) 新津 健 平成10(1998)年2月「曾利土偶の発生と展開」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集(2)』(株)勉誠社 277-294頁
- (文献:59) 宮坂英弼・小平幸衛 昭和7(1932)年3月「顔面把手発掘手記」『信濃考古學會誌』第3年第1輯 信濃考古學會 15-17頁
- (文献:1k) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「昭和十六年度の発掘」『尖石』茅野町教育委員会 62・63頁
- (文献:4b) 宮坂英弼 昭和23(1948)年8月「八、其の他の出土品 土製耳飾」『原住民族の遺蹟-八ヶ岳山麓尖石遺蹟研究-』蓼科書房 114・115頁
- (文献:60) 吉田泰幸 平成14(2014)年12月「縄文時代における土製栓状耳飾の研究」『名古屋大学博物館報告』No.19 名古屋大学博物館 29-54頁
- (文献:61) 小林深志 平成6(1994)年3月「第53 函土製品・石製品」『勝山遺跡-グリーンプラザ茅野(仮称)建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-』茅野市教育委員会 71頁
- (文献:62) 宮坂英弼 昭和27(1952)年3月「石器時代の食生活-八ヶ岳西山麓出土資料の検討-」『諏訪教育』第二號 諏訪教育会 61頁
- (文献:63) 守矢昌文 平成2(1990)年12月「2石器1)石鏃」『棚畑-八ヶ岳西山麓における縄文時代中期の集落遺跡-』茅野市教育委員会 576-578頁
- (文献:17b) 寺内隆夫 平成17(2005)年1月「第3章聖石遺跡 第3節縄文時代の遺物 4石器 ①石鏃・②石槍」「第4章長峯遺跡 第3節縄文時代の遺物 4石器①石鏃 ②石槍」『担い手育成基盤整備事業(芹ヶ沢地区)国道299号線バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 聖石遺跡・長峯遺跡・(別田沢遺跡)』長野県諏訪地方事務所 長野県諏訪建設事務所 長野県茅野市 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 74頁・155頁
- (文献:17c) 寺内隆夫 平成17(2005)年1月「第3章聖石遺跡 第3節縄文時代の遺物 4石器 ⑨原石・石核 ⑩小形剥片・⑪碎片」「第4章長峯遺跡 第3節縄文時代の遺物 4石器 ①原石・石核 ②小形剥片・碎片」『担い手育成基盤整備事業(芹ヶ沢地区)国道299号線バイパス建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 聖石遺跡・長峯遺跡・(別田沢遺跡)』長野県諏訪地方事務所 長野県諏訪建設事務所 長野県茅野市 財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター 76頁・158頁
- (文献:2b) 小林深志 平成19(2007)年3月「第24 函 出土石器(12)」『尖石遺跡整備報告書(2)-尖石地区試掘調査報告書-』

第5章 調査の成果

茅野市教育委員会 29頁

- (文献:64) 鶴飼幸雄 平成6(1994)年8月「八ヶ岳山麓における縄文中期の軽石製品」『中部高地の考古学Ⅳ 長野県考古学会30周年記念論集』長野県考古学会 125頁
- (文献:9b) 宮坂英弼 昭和25(1950)年11月「八ヶ岳西山麓與助尾根先史聚落の形成についての一考察(下)」『考古學雜誌』第36巻第4號 日本考古學會 50・51頁
- (文献:65) 守矢昌文 昭和55(1980)年2月「第1節 調査区における遺物の分布と出土状態」『与助尾根南遺跡』茅野市教育委員会 56-58頁
- (文献:66) 尖石考古館 昭和51(1976)年8月「石器・石製品 403」「図版解説 403」『尖石考古館図録』茅野市教育委員会 149・185頁
- (文献:4c) 宮坂英弼 昭和23(1948)年8月「八、其の他の出土品 垂飾石」『原住民族の遺蹟—八ヶ岳山麓尖石遺蹟研究—』蓼科書房 115-117頁
- (文献:11) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「住居址の総観 石壇と埋甕」『尖石』茅野町教育委員会 233頁
- (文献:67) 戸澤充則 昭和25(1950)年1月「與助尾根発見の新資料」『史実誌』第四号 史実会研究室 15・16頁
- (文献:68) 鶴飼幸雄 平成18(2006)年3月「八ヶ岳山麓の弥生人—山麓の弥生遺跡と古墳時代初頭集落の動向をめぐって—」『新尖石縄文考古館開館5周年記念考古論集』茅野市尖石縄文考古館 130・131頁
- (文献:54c) 鳥居龍藏 大正13(1924)年12月「一〇 豊平村南大鹽廣見尖石遺跡」『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會 45・46頁
- (文献:20a) 今井弘樹 昭和5(1930)年10月「尖石遺跡地圖 其弍」『尖石遺跡發掘記』今井私製版
- (文献:69) 諏訪教育會・諏訪史談會 昭和15(1940)年秋「長野縣諏訪郡豊平村尖石遺蹟石器時代住居址分布図」『尖石遺蹟に就て』
- (文献:1m) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「尖石・与助尾根兩遺跡地形及び住居址分布図」『尖石』茅野町教育委員会 216頁
- (文献:2c) 小林深志 平成19(2007)年3月「第1図調査年度別発掘区」『尖石遺跡整備報告書(2) —尖石地区試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 3・4頁
- (文献:70a) 小林深志 平成11(1999)年3月「第1図発掘区と遺構の分布」『特別史跡尖石遺跡—平成10年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 5・6頁
- (文献:70b) 小林深志 平成11(1999)年3月「第1図発掘区と遺構の分布」『特別史跡尖石遺跡—平成10年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 27頁
- (文献:18c) 矢島数由 昭和27年~29年『如雲諏訪史抄 堅穴考』私製版 70-122頁
- (文献:71) 水野正好 平成11(1999)年6月「与助尾根遺跡から縄文時代を發掘する(二)」『文化財信濃』第26巻1号 長野県文化財保護協會
- (文献:72a) 小池岳史・守矢昌文 平成28(2016)年3月『特別史跡尖石石器時代遺跡保存管理計画書』茅野市教育委員会
- (文献:2d) 小林深志 平成19(2007)年3月「第1図調査年度別発掘区」『尖石遺跡整備報告書(2) —尖石地区試掘調査報告書—』茅野市教育委員会
- (文献:73a) 小林深志 平成7(1995)年3月「第1節基本層序」『特別史跡尖石遺跡—平成6年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 2頁
- (文献:27b) 今井弘樹 昭和6(1931)年6月「諏訪郡尖石遺跡の發掘について」『信濃考古學會誌』第二年第五・六輯、信濃考古學會 151・154頁

- (文献:1i) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「小平幸衛との発掘」『尖石』茅野町教育委員会 23頁
- (文献:1n) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「尖石遺跡が世に出るまで 挿図4 尖石林道で発見の石囲炉(今井氏原図)」『尖石』茅野町教育委員会 10頁
- (文献:1m) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「尖石・与助尾根両遺跡地形及び住居址分布図」『尖石』茅野町教育委員会 216頁
- (文献:23d) 鶴飼幸雄・小林深志・守矢昌文 平成3(1991)年3月「第2図遺跡グリッド図」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 7・8頁
- (文献:22d) 小林深志 平成6(1994)年3月「第1図遺構分布図」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 7・8頁
- (文献:1o) 宮坂英弼 昭和32(1957)年12月「昭和十六年発掘 第一八址竪穴住居址 未完掘住居址」『尖石』茅野町教育委員会 118・119頁
- (文献:23d) 鶴飼幸雄 平成3(1991)年3月「第2節遺跡の地形と層序」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 6頁
- (文献:25a) 小林健治 平成5(1993)年3月「第IV章まとめ」『尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 14頁
- (文献:23a) 鶴飼幸雄・小林深志・守矢昌文 平成3(1991)年3月『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会
- (文献:23d) 鶴飼幸雄 平成3(1991)年3月「第2節遺跡の地形と層序」『国特別史跡 尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—』茅野市教育委員会 6頁
- (文献:73b) 小林深志 平成7(1995)年3月「第2節今年度調査区における層序」『特別史跡尖石遺跡—平成6年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 2頁
- (文献:74a) 中堀謙二他 平成7(1996)年3月『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』「附編 自然科学的調査」茅野市教育委員会 20—66頁
- (文献:74b) 株式会社地球科学研究所 平成7(1996)年3月「附編 自然科学的調査 第2節 尖石遺跡の放射性炭素年代測定」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 26—31頁
- (文献:74c) 中堀謙二 平成7(1996)年3月「附編 自然科学的調査 第3節 尖石遺跡の花粉分析」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 32—41頁
- (文献:74d) パリノサーベイ株式会社 平成7(1996)年3月「附編 自然科学的調査 第5節 尖石遺跡の植物珪酸体」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 52—56頁
- (文献:74e) パリノサーベイ株式会社 平成7(1996)年3月「附編 自然科学的調査 第6節 尖石遺跡出土の大型植物遺体」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 57—58頁
- (文献:74f) 大木正夫 平成7(1996)年3月「附編 自然科学的調査 第7節 尖石遺跡の土壌」『特別史跡尖石遺跡—平成7年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る試掘調査報告書』茅野市教育委員会 59—68頁
- (文献:72b) 株式会社パスコ 平成28(2016)年3月「別編 (1)植物 (2)動物 (3)水分環境」『特別史跡尖石石器時代遺跡保存管理計画書』茅野市教育委員会 117—126頁

第5章 調査の成果

- (文献:75) 宮坂英式寄贈資料(書簡集2-14) 昭和17(1942)年11月9日付千葉醫科大學解剖學教室教授小池敬事から宮坂英式宛書簡
- (文献:76) 宮坂英式寄贈資料(書簡集2-15) 昭和18(1943)年3月4日付千葉醫科大學長小池敬事から宮坂英式宛書簡
- (文献:77) 宮坂英式 昭和43(1968)年1月「炭化した^{どんぐり}団栗」「尖石縄文人の食生活」『尖石 八ヶ岳山麓に眠る縄文文化の謎をとく』學生社版
- (文献:78) 宮坂英式 昭和27(1952)年3月「石器時代の食生活—八ヶ岳西山麓出土資料の検討—」『諏訪教育』第二號 諏訪教育会 56-65頁
- (文献:1p) 宮坂英式 昭和32(1957)年12月「第一次発掘 発掘日録(昭和二十一年、二十二年)」『尖石』茅野町教育委員会 151頁
- (文献:79) 中村耕作 平成23(2011)年「出土状況分析と同位体比・元素分析による縄文時代釣手土器・香炉形土器・異形台付土器の用途推定」『高梨学術奨励基金年報 平成22年度研究成果概要報告』、財団法人高梨学術奨励基金
- (文献:80) 國木田大 平成23(2011)年「縄文時代におけるクッキー状炭化物の研究」『高梨学術奨励基金年報 平成22年度研究成果概要報告』、財団法人高梨学術奨励基金、85-92頁
- (文献:81) 中村耕作・國木田大 平成24(2012)年「クッキー状・パン状炭化物の炭素・窒素同位体分析とその出土状況」『長野県考古学会50周年記念プレシンポジウム 縄文時代中期の植物利用を探る 予稿集』長野県考古学会縄文中期部会 56-69頁
- (文献:82) 吉田邦夫 平成18(2006)年「炭化物の安定同位体分析」『新潟県立歴史博物館研究紀要』第7号 新潟県立歴史博物館 51-58頁
- (文献:83) 吉田邦夫 平成20(2008)年「縄文人の食性と生業」『季刊考古学』105号 雄山閣出版 51-56頁
- (文献:84) 中沢道彦 平成24(2012)年「長野県における縄文時代中期の植物質食料利用について」『長野県考古学会50周年記念プレシンポジウム 縄文時代中期の植物利用を探る 予稿集』長野県考古学会縄文中期部会 21-29頁
- (文献:85) 谷 和隆・塚原秀之・鶴田典昭・中島 透・橋詰潤・羽生俊郎・前田一也・村田弘之・山科 哲 平成25(2013)年「中部地方の黒曜石原産地分析資料」『一般社団法人日本考古学協会2013年度長野大会研究発表資料集』日本考古学協会2013年度長野大会実行委員会 63-174頁